

和洋形式からみた現代東北都市住宅の空間構成

著者	梅津 光男
号	1289
発行年	1991
URL	http://hdl.handle.net/10097/10096

氏 名	梅 津 光 男
授 与 学 位	博 士 (工 学)
学位授与年月日	平成 4 年 3 月 18 日
学位授与の根拠法規	学位規則第 5 条第 2 項
最 終 学 歴	昭和 44 年 3 月 東北大学大学院工学研究科建築学専攻 修士課程修了
学 位 論 文 題 目	和洋形式からみた現代東北都市住宅の空間構成
論 文 審 査 委 員	東北大学教授 桂 久男 東北大学教授 平井 和喜 東北大学教授 松本 啓俊 東北大学助教授 近江 隆

論 文 内 容 要 旨

第 1 章 序 論

本研究は、東北地方における現代の独立、専用、持ち家の都市住宅を対象に、住宅間取りとその間取りを構成する各室の内部について、和風と洋風の結合に着目して空間構成の特質を分析、考察し、和洋形式からみた新しい空間像を見出そうとするものである。

第 1 章では、先ず、近年、各室の洋風化をはじめとして住宅空間の変容が著しく、住様式の在り方が活発に議論されていることなど、研究の背景に触れて本研究の目的について述べるとともに、既往の関連研究のいくつかをとりあげ、これに加えて本研究の研究的、社会的な意義について述べている。次いで、本研究の基礎となる住空間、住宅空間の見方、また住宅における和洋形式の見方すなわち研究仮説を示して、具体的な研究課題とその分析、考察の手続きについて述べている。

第 2 章 洋室の普及と和洋統合型間取りの形成

第 2 章では、各室の基本形態と分離・結合形態を和洋形式の視点から分類して、それによる住宅間取りの室構成について分析している。

1960 年以降、各室の洋室化が著しく進んでいる。洋室化は、伝統的和風の座敷を継承しながら、日常的な生活空間である家族室と個人室の各室にわたっている。また室の分離・結合形態は、洋室化にともない洋風の独立室が増えているが、和風の続き間は家族室などに継承されており、この続き間はとくに減少する傾向はみられない。洋室化が進んでいる部分では、その洋室を含んで続き間

は継承されている。ただし、和風の続き間とはいえ、他室を通り抜けなければならないものは少なくなり、廊下などによる室の結合すなわち洋的な室結合の形式を合わせてもつようになってきている。

現代住宅の間取りは、このように和風と洋風の形式で全体が構成されている。これは和洋型というべき間取りであるが、かつての和洋折衷型とは明らかに異なる。和と洋の異なる形式を日常普段の生活空間において結合させ、より統合的に構成している。現代の和洋型は和洋統合型といえる。

現代の間取りは、洋室化している日常生活空間の主な用途によって、食事室のみが洋室化したD型、また食事室に加えて子供室などの個人室が洋室化したPD型、それに食事室、個人室とともに居間も洋室化したPLD型の3つの主要な型に分類して、その建設時期別の分布をみると、D型は59年以前には多数を占めていたが、60年以降には大きく減少して、代ってPD型が著しく増加し、PLD型も増えた。PLD型は、75年以降の近年においてもさらに増加する傾向を示している。各間取り型とも和風の続き間形式を家族室などに継承しているが、PLD型においては他室通り抜けのものが最も少なく、かつ和室と洋室が連続する和洋の続き間が和風の続き間よりも多くなるなど、各間取り型における和風と洋風の構成には違いが認められる。現代の和洋型間取りは、社会現象としてマクロにみれば、D型からPD型、そしてPLD型と進んでおり、和洋統合型間取りの典型は、近年においても増加する傾向を示しているPLD型ということができる。

第3章 和洋統合型間取りを支える各室の新日本風

第3章では、間取りを構成している各室の内部について、その和洋の空間構成を明らかにするために、新築住宅における居間などの家族室、また夫婦室と子供室の個人室を対象として、床面の構成や壁などの室側面の構成、それに室に置かれる家具、寝室などの構成を分析している。

各室は家族室と子供室を中心に現在では洋室化が著しく進んでいる。内部の空間構成は、洋室の家族室をはじめ、同じく洋室の子供室、また和室の家族室などにおいては和風と洋風の形式の共存、結合がかなり認められる。例えば、洋室のばあい、カーペット仕上げの床にして椅子座の家具のみでなく床座の家具も置く、それが家族室であれば和風の掃き出し窓をもち、また個人室であれば和風の押し入れをもって寝具にはふとんを用いるなどである。住宅の間取りとともに、その部分空間である各室の内部もまた和風と洋風の形式の統合によって空間が構成されている。

このような各室内部における和洋統合の空間構成、とりわけ近年ますます増加して和洋統合型の間取りを支えている洋室のそれについては、和風でもなく、洋風でもない、現代の日本で新しく形成されたものという意味で新日本風と呼ぶのがふさわしく、この方が空間形態の実態にも合う。

第4章 和洋統合型間取りの1階連続開放2階独立閉鎖型空間秩序

第4章では、現代の都市住宅における空間構成の特質をさらに明らかにするために、間取りにおける各室や各部分空間相互の空間関係を分析し、そこにある空間秩序を見出そうとする。ここでは、間取りにおける空間の配分、また各室、各部分と外部環境との関係、それに内部における各室、各部分空間相互の分離と結合の関係を分析している。

空間相互の関係は、D型からPD型、さらに和洋統合型の典型といえるPLD型の間取りになるにともなう、次のような特徴、傾向を示すようになる。まず、洋室化している生活空間の面積配分が大きいという洋室重視の空間配分、また2階部分の床面積の配分も大きく、2階重視の空間配分がみられる。このことと符号して、子供室に限らず夫婦室を含む個人室全体の2階化が多く見られる。したがって個人生活空間は、家族生活空間などの他の空間とは階（フロア）による分離が進む。各個人室は同じ2階に位置していても廊下などによる分離と結合が多くみられ、相互は独立的、閉鎖的な関係をもっている。個人生活空間においてのみでなく、家族生活空間とサービス空間との間など、各生活空間は階による分離とともに、通路専用空間による分離と結合が間取りの全般にわたって行われている。

PLD型のばあいには、1階の家族生活空間の中において他の間取り型とは異なる特徴が認められる。居間空間と食事空間との分離、結合関係は同一室にする例が大変に多く、これに続き間を加えると、これらの連続的な関係、開放的な関係は全体の約半数に達する。また家族生活空間と外部空間との関係においても、居間空間は洋室であるが、南面に和風の掃き出し窓をもち、庭とは直接に行き来ができる関係のものが比較的多い。PLD型間取りの家族生活空間は内部の各空間相互の関係においても、外部空間との関係においても連続的、開放的な分離と結合の関係を多くもっている。

このような空間関係は、洋室を中心としつつ、1階の家族生活空間においては外部空間との関係も含めて連続的、開放的な関係であり、他方、2階の個人生活空間は独立的、閉鎖的な関係である。PLD型に代表される和洋統合型間取りにおける各室、各部分空間相互の関係は、1階連続開放2階独立閉鎖型の空間秩序が形成されてきているといえることができる。

第5章 和洋統合型の住意識と住み方

第5章では、住宅を新築するときの住居者の志向、また各室の使い方などについて分析を行っている。

新築時の居住者の志向は、D型からPD型、さらに和洋統合型の典型であるPLD型の間取りになるにともない、次のような特徴、傾向が認められるようになる。家族生活のみでなく、それとともに個人生活のどちらも大事にし、また機能性と心地良さのどちらも大事にしながら、その住み方ができるような間取りを志向する傾向が強くなる。これは、建築材料や構法に、また室に置く家具などに伝統的な和風のものの、新しい洋風のものの良いものは積極的に使いながら実現しようとする。このため、各室の空間構成に関しては、家族室では多目的な空間として色々な用途にも使えるように、室は連続的、開放的な空間構成、いわば和風の空間構成であることを志向する一方、個人室では個人専用の室として独立的、閉鎖的な空間構成、こちらは洋風の空間構成であることを志向する。この居住者の志向については、数量化Ⅲ類の分析も行ない、PLD型にみられる上記内容の意識をはじめとして、間取り型に対応する意識の型を見出している。

室の基本形式別にみた各室の使い方は次のようである。家族室のばあい、座敷やその他の和室に比べて洋室はより多目的で、より多様な使い方などが見られる。個人室のばあいには、就寝やこれに類似あるいは関連する行為に限らない他の様々な諸生活行為も独立した個人の生活行為として営ま

れることが、これも洋室の方に多くみられる。また洋室化している家族室と個人室は、いずれにあって椅子座の住み方とともに和風の床座の住み方がかなりみられる。このような和風と洋風が共存する住み方は、先にみた住意識、すなわち伝統的な和風であれ、また新しい洋風であれ、それぞれの良いところは積極的に取り入れていこうとする住意識のひとつの現れである。

第6章 和洋統合型間取りの形成過程と現代的な意義

第6章は本研究のまとめである。既往の諸文献による知見と本研究における分析結果を踏まえて考察を行ない、和洋統合型間取りの形成過程と現代的な意義について説明している。

わが国の伝統的な和風住宅の間取りである和型、この和型の変容形態といえる中廊下型、それに和洋統合型の前段階である和洋折衷型のそれぞれについて、間取り型の特徴を述べ、形成過程を考察している。また和洋折衷型については、和洋統合型の形成要因である和風と洋風の結合における不整合関係を考察している。そして、和洋統合型の特徴、これと和洋折衷型との異同を明らかにして、その形成について説明するとともに、この和洋統合型間取りの形成は、各室内部の構成も含んで、もはや和風でもない、洋風でもない新しいスタイルの形成であることを述べている。最後に、都市住宅の将来展望、また本研究と計画との関係についても言及している。

審 査 結 果 の 要 旨

近年、住宅空間の著しい変容を背景に、建築計画学においては、これからの新しい住様式（住宅と住み方）のあり方についての議論が活発であるが、議論の基礎となる空間構成についての客観的知見が必要とされている。筆者は、東北地方における現代の独立、専用、持ち家の都市住宅をとりあげ、その内部空間は和風と洋風による構成が支配的であることに着目して、この視点から住宅間取りと各室の内部における空間構成を分析、考察し、和洋形式からみた新しい空間像を見出した。本論文はこれらの結果をまとめたもので全編6章よりなる。

第1章は序論である。

第2章では、各室の基本形態と分離・結合形態を和洋形式の視点から分類して、それによる住宅間取りの室構成について分析している。現代の都市住宅は和風と洋風の形式で構成されており、これは、かつての和洋折衷型とは明らかに異なる和洋統合型の間取りであることを明らかにしている。

第3章では、住宅間取りを構成している各室の内部について分析している。各室の内部もまた和風と洋風の統合によって空間が構成されており、これは、現代の日本で新しく形成された新日本風の空間構成であることを明らかにしている。

第4章では、現代の都市住宅における空間構成の特質をさらに明らかにするため、間取りにおける空間の配分、また各室・各部分空間と外部環境との関係、それに内部における各室・各部分空間相互の分離と結合の関係を分析している。和洋統合型の間取りにおいては、洋室を中心としつつ、1階の家族生活空間では外部環境との関係も含めて連続的・開放的な空間秩序、他方、2階の個人生活空間では独立的・閉鎖的な空間秩序が形成されてきていることを明らかにしている。

第5章では、住宅を新築するときの居住者の志向、また各室の使い方などについて分析を行ない、和洋統合型の住意識と住み方を明らかにしている。

第6章は本研究のまとめである。既往の諸文献による知見と本研究の分析結果を踏まえた考察を行ない、和洋統合型間取りの形成過程について説明している。また、その現代的な意義と将来の展望について述べ、本研究と建築計画との関係にも言及している。

以上要するに、本論文は現代都市住宅の全体と部分にわたる分析によって新しい空間構成を見出し、その形成過程も明らかにして建築計画の基礎的な知見を与えたもので、建築計画学に寄与するところが少なくない。

よって、本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認める。